論　文

東日本大震災被災者支援活動の試み
―ほっとひろば西九大・経過報告（第２報）―

池田　久剛・長野　恵子・高尾　兼利・古賀　靖之・西村　喜文

（西九州大学大学院　健康福祉学研究科）

（平成24年11月14日受理）

Support Activities for Victims of the Great East Japan Earthquake
― progress report for Hotto Hiroba Nishi Kyudai (No.2) ―

Hisataka IKEDA, Keiko NAGANO, Kanetoshi TAKAO, Yasuyuki KOGA and Yoshifumi NISHIMURA

Graduate School of Health and Social Welfare,Nishikyushu University

（Accepted: November 14, 2011）

Abstract

This paper discusses community-based clinical psychological support activities for families who were victims of the Great East Japan Earthquake, and as a result, took refuge in Saga Prefecture. The paper traces the progress of these activities while referring to the results of the questionnaire survey conducted among the participants.

These activities commenced in June 2011,and as of October 2012, 66 sessions have been conducted primarily on a weekly basis. While the activities were initially geared toward providing a venue that would allow victims to exchange information, they gradually also began to function as a means of psychotherapeutic support through which they could vent their worries and troubles.

Although the number of participants in these activities has fluctuated, the inclusion of events between the activities has led to an increased cohesiveness and familiarity between the participants. This in turn has also increased their security and trust in the group, making it easier for them to talk about their anxieties and worries. Discussing these matters with others has led to the participants feeling more comfortable and experiencing a sense of enjoyment; this demonstrates a sense of expectation and satisfaction with the activities.

While it has been more than one and a half years since the earthquake, the victims still living in temporary accommodation continue to face an uncertain future. Therefore, there is still a major need for Hotto Hiroba Nishi Kyudai; it plays an important role in the lives of those involved.

キーワード：東日本大震災　被災者支援　臨床心理的地域援助

Keywords：Great East Japan Earthquake, disaster-victim support, community-based clinical psychological support

１．はじめに

昨年（平成23年３月11日）の東日本大震災、そしてその後の原子力発電所の爆発事故の結果、放射線の影響を危惧する自主避難者を含め、多くの被災者が全国に避難をした。

佐賀県においても、累計で193世帯498人（平成24年10月４日現在）が避難生活を送っている。

このような事態を受け、昨年の６月に、西九州大学臨床心理相談室を拠点として、「ほっとひろば西九大」（以下「活動」と略記する）が開催されるに到った。

開催（平成24年６月）から同年10月末までの様子については池田他（2012）の報告（以下（第１報）と略記する）に述べたが、その後も活動は継続され、平成24年10月末現在で通算66回（うち１回は、開催予定であったが九州北部豪雨のため中止）開催されている。前回の（第１報）をふまえ、その後の経過について報告し、考察を試みたい。

２．経　　過

開催に当たっての経緯や準備等については（第１報）において詳述したので、ここでは割愛する。

以下便宜上４期に分けて活動の経過を報告する。

（第１期：平成23年６月～平成23年10月；＃１～＃21）

第１期については、（第１報）において述べているところであるが、その後の経過と合わせ考察するために、簡潔にまとめる。

６月の第１週より開催された活動は、当初１～２家族の参加で始まった。８月には一時帰省もあり参加者は一時的に減ったが、それでも必ず毎回参加者はあった。９月以降、新規の参加者が続き、10月は、６家族のうち何らかの形で４家族が、毎回参加することとなった（以下、参加者の推移は図１参照。なお、図１中のスタッフとは、学部生・大学院生・修了生・教員で構成されている）。

表１．第１期：参加者アンケートより（主なもの抜粋。以下同様。）

- **同じ被災された方とお話しできると、心が安まります。貴重な場。（H.23.６.25）**
- **子どもたちが毎週楽しみにしているので、遊んで気晴らしができれば。とても満足できた。（H.23.７.２）**
- **（子どもが）楽しい時間を過ごせるのを楽しみにしていた。笑顔がずっと続いていて、とても満足しています。（H.23.７.16）**
- **毎週土曜日、子どもたちと一緒に参加できることが、私たちの楽しみの一つになっています。（H.23.７.16）**
- **毎日色んなことを思い、生活しているので、ここに来て、私も子どもたちも、たくさんお話しができればと思いました。話をたくさん聴いてもらってよかったです。（H.23.９.10）**
- **個人個人状況は異なりますが、今回の被災で傷ついた人たちが語れるこのような場があるのは、とても心のよりどころになります。（H.23.９.24）**
- **子どもの心の傷を言えたことで、私の気分も軽くなりました。ありがとうございます。（H.23.10.22）**

（第２期：平成23年11月～平成24年３月；＃22～＃40）

この時期は、12月17日のクリスマス会（＃28）をピークに参加者が増加していった。11月、12月にそれぞれ１組、２月に２組の新しい家族を迎えることとなった。

12月17日のクリスマス会を開催するに当たっては、果たして、避難してきている方々が、そのような行事を開催しても、心から楽しめるような心境にあるのだろうか、いかんともしがたい現実を重ね合わせたときに、かえって辛い思いをさせることになるのではないだろうかと、スタッフ間で協議を重ねた。参加者の様子も伺いながら、派手になり過ぎないよう、慎重に計画を進め、学

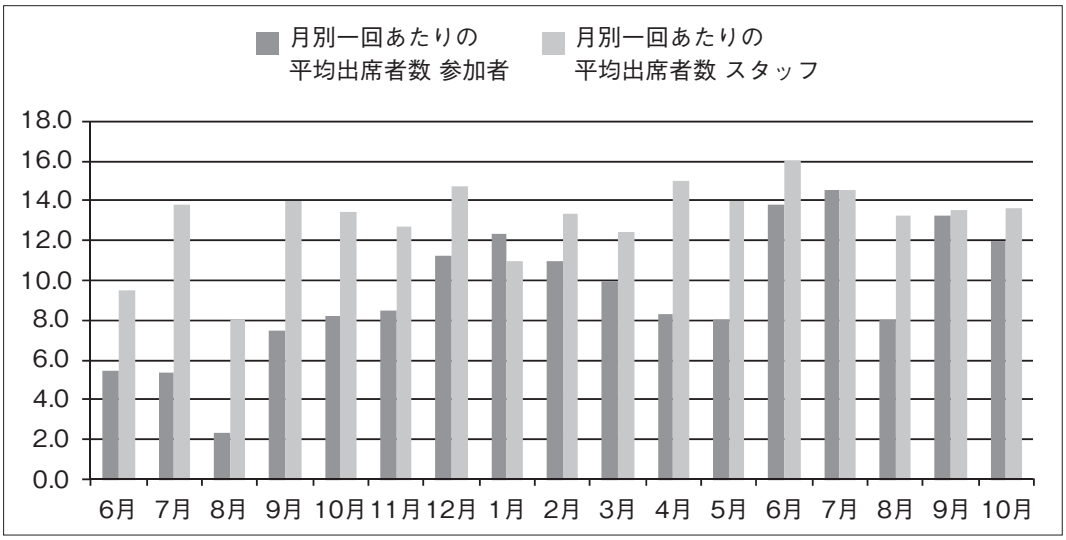

図１　月別平均参加者の推移

表２．クリスマス会（H.23.12.17）のアンケートより

- クリスマス会をしていただけると聞いていたので、親子で楽しみにしてきました。私たちが思っていた以上の楽しい会で、とても嬉しかったです。福島では毎年クリスマスパーティーをしていたので、今年は無理かなと思っていた分、幸せでした。
- クリスマス会を楽しみにしてきました。美味しいお料理と、楽しい企画がたくさんあり、本当によい時間を過ごせました。
- 皆さんと和やかに過ごしたい、C'mas 会の楽しさを娘に伝えたいと思ってきました。とても満足です。今年は C'mas はないと思っていたので。
- いろんなことをして頂き、寂しく、不安に過ごしている中で、本当にありがたく思います。これからもほっとひろばが続いてくれたらなぁと思います。
- 子どもを丁寧に見ていただき、ありがとうございました。私も皆さんとお話ができて、楽しかったです。
- 毎回、私もですが、子どもがとっても楽しませていただいて、それだけでも、とても有難いです。
- 少しでも不安を分かち合って、気持ちが楽になれば…と思い参加しました。楽になりました。子どもも楽しめていてよかったです。

生による出し物や、料理などを企画した。

結果は、１日の参加者数としてはその時点では最高の19名が出席をし、喜びの感想が多数寄せられた（表２）。

クリスマス会の勢いは年を越えても維持されたかのように、１月も１回平均12名を超える参加者があった。

２月３月は、風邪の流行なども影響してか、やや参加者は減少傾向にあった。しかし１回平均10名以上の参加者があった。

そのような中で、３月に、東日本大震災後１年を迎えることとなった。アニバーサリー反応も危惧され、いつにも増して慎重な対応を心がけた。

３月３日（#36）に、ささやかにひな祭りを開催した。ペーパークラフトによる段飾りや、ひな祭りらしい飲食物などで季節感を醸し出しながらも、プログラム自体は通常のプログラムとした。震災後１年を控え、１年目をさりげなく迎えることができるよう心がけた。

翌週の３月10日（#37）は、震災後ちょうど１年目の前日ということもあってか、取り立てて行事を企画したわけではないのにも拘わらず、平均を上回る15名もの参加があった。活動の中では、翌日に控えた震災後１年を、静かに迎えることができた。参加後のアンケートからは、様々な思いを抱えて参加されていたことが伺えた。

また、子どもたちがどうしても室内にこもりやすいこの時期、父親不在で子どもたちと向き合う時間の多い、慣れない集合住宅での生活の負担に、悲鳴にも似た叫びを訴える声も少なからず聞かれた。

表３．第２期：参加者アンケートより

- 今日は、参加したある方の深刻な悩みを聞かせていただき、皆で知恵を絞って…よかったです。（H.23.12.24）
- 今日は悩みを相談し、皆さんたくさん意見を下さり、少し気持ちが軽くなりました。（H.23.12.24）
- 被災した方々との情報交流と、子どもが行きたいと言うほど、こちらの方々に遊んでもらえることを楽しみにしています。（H.23.12.24）
- 先生方や、皆さんとお話をして、気持ちが楽になればよいな…と思い参加しました。先生にお話を聴いていただき、カウンセリングを紹介していただきました。先が見えてきた感じがし、満足です。ありがとうございました。（H.24.１.14）
- 年末から年明けにかけて、たくさんのことがあり、久しぶりのほっとひろばで話せたらと来ました。子どももとてもリラックスできて、私も少しでも皆さんに話を聞いてもらえて良かったです。（H.24.1.14）
- 子どもたちが是非今日は来たいと言っていたので、お兄さん、お姉さんに遊び相手になってもらえたらと思いました。とても楽しそうに遊んでいて、私も満足しました。（H.24.１.28）
- 新しい顔の参加者もいて、楽しくお話ができました。「話す」ってことは、心が軽くなりいいですね。（H.24.２.11）
- いろいろ葛藤があり、お話を聞いていただきたいと思ってきました。不安が和らぎました。（H.24.２.18）
- おひな様の飾りやケーキに甘酒、季節を感じられていつもよりも温かい気持ちになりました。（H.24.３.３）
- 子どもがのびのび遊んでもらえて、親がほっとできるように期待してきました。とても満足できました。（H.24.３.３）
- 前回子どもたちがとても楽しそうにしていたので、また、そういう姿を見たくて。また、私もいろいろお話ししたくて。（H.24.３.10）
- 震災から明日で１年。家にいると考え事ばかりしてしまうので、「ほっとひろば」でゆったりとした時間を過ごしたいと思い、今日は来ました。（H.24.３.10）
- 日頃思っていたことを話せてすごく楽になりました。（H.24.３.10）
- ここの集まりでしか喋れないことたくさんあります。それを言えて本当に心地よいです。（H.24.３.10）
- 今年の３.11後、避難している皆さんの生活や、気持ちが、一層困難を抱えている、と感じています。みんなでほっとする時間を過ごすことの大切さも痛感しています。（H.24.３.17）

（第３期：平成24年４月～平成24年６月；#41～#52）

年度が改まり、児童・生徒の進級進学などの環境の変化もあれば、このタイミングに、元の居住地に戻る決心をされた家族もあった。

また、震災直後は、心の準備をする暇もなく、着の身

着のままの避難であったり、全く新しい環境で、日々の生活を整えるのに精一杯であったりしていたのが、震災から一年が経過し、とりあえず毎日の生活も軌道に乗り、冷静さを取り戻してきたこの時期、被災者の方たちにとっては改めて、今後の生活をどうするのか、その見通しの立たなさや、家族が別れて生活することに対する負担などがのしかかっているようであった。

元の居住地に戻る人を見送るのも複雑な心境であり、「戻るも地獄、留まるも地獄」とでもいった心境を吐露される参加者もあった。

そのような状況を反映してか、４～５月は１回あたりの平均参加者数が10人に満たなかった。

表４．第３期：参加者アンケートより

- **カウンセリングを受けたい、娘が遊べるように、と思ってきました。満足です。次もいやしてください。（H.24.４.14）**
- **みんなで話をして、自分の悩みが少しでも軽くなればと思い来ました。話をしていたら時間が過ぎるのが早く感じました。（H.24.４.28）**
- **娘も私も、このひろばが大好きです。生活の一部、なくてはならないものなので、これからもよろしくお願いします。（H.24.４.28）**
- **先生と面談でお話しさせていただいたことを大切にして生活していこうと思います。（H.24.５.12）**
- **仕事を辞めて、久しぶりに参加しました。たくさんの方とお話しでき、気持ちも明るくなりました。（H.24.５.26）**
- **子どもの気持ちを楽にさせてあげたくて参加しました。（H.24.５.26）**
- **私の悩み、皆さんの悩み、お互い無理なくお話しできたら嬉しいです。（H.24.５.26）**
- **子どもがみんなで遊びたいと言ってました。私もまた、お話ししたいと思いました。（H.24.６.２）**
- **久しぶりに皆さんとお会いしたいと思い来ました。時間が短かったけど、満足できました。たくさんお話ししたいです。（H.24.６.２）**
- **楽しくて、私の話しも聞いてもらえて、嬉しかったです。（H.24.６.２）**
- **自分の悩みを話せてスッキリしました。ありがとうございます。（H.24.６.９）**
- **この一週間、私の体調があまり良くなくて、今日参加できるかどうか心配だったけれど、話をしたい気持ちが強くて、参加できたらと思っていました。（H.24.６.９）**
- **家にいても、あまりゆっくり休めないので、今日参加できて良かったです。（H.24.６.９）**
- **欠席とお伝えしていましたが、少し参加させていただきました。ありがとうございます。（H.24.６.９）**
- **ひろばの先生方に相談したいこともありまして…力になって下さり安心しました。（H.24.６.23）**

その一方で、６月には２組の新しい家族も迎えた。

参加される方は、表４で示されているように、短時間でも、あるいは当初欠席の予定であっても、強い思いで参加されていることが伝わってくる。また、第２期頃より顕著になってきた様でもあるが、親グループや個別面接が、悩みを持ち込み、みんなに、あるいは教員スタッフに話を聞いてもらう場として機能していることがわかる。

そのような中、６月にほっとひろば開設一周年＆50回記念行事を開催した。事前に告知をすることで、参加者にも徐々に期待感が高まっていったように感じられた。そして行事の日（実際には＃52）には、これまでで最多の25名の参加があった。

表５．ほっとひろば開設一周年＆50回記念（H.24.６.30）のアンケートより

- **子どもたちのことで行き詰まっていたので、話をして楽になれました。**
- **１周年、早かったような、長かったような。辛いこと、悲しいこと、たくさんあったけれど、ここでの出会いも大切にしたいと、改めて思いました。**
- **招待状が届いてから、TV 台に飾り、娘と二人でとても楽しみにしていました。**
- **50回開催、１周年という節目を迎え、私も、少しずつ前に進んでみようかな・・・と思います。**
- **子どもたちが楽しく遊べる場・自分の悩みを話して、元気になれる場を期待してきました。大満足です。**
- **日頃忙しく子どもに構ってやれないことが気がかりでしたが、優しく接していただきありがとうございました。自分も相談できる機会を設けていただき、スッキリしました。本当にありがとうございます。**
- **子どもたち、また、私自身、気持ちを外に出せたらと思います。**
- **子どもたちも、とても喜んでいました。私も、久しぶりに、楽しく過ごすことができ、リラックスさせていただきました。**

また、必ずしもこの時期に限ったことではないが、活動に対する期待や満足として、子どもに関係するものが数多く見られた。

（第４期：平成24年７月～平成24年10月；＃53～＃66）

６月末の開設一周年＆50回記念の勢いか、７月の１回あたりの平均参加者数は14名を超えた。８月はまた一時帰省などもあり少なめではあったが、９月、10月と、平均12名を超える参加者があった。

この間７月には福岡県久留米市で、福島県から子どもを連れて母子で避難してきた母親が、長女に対する虐待で逮捕されるという事件が発生している。

背景には、避難生活に伴うストレスなどが推測されるが、全く他人事ではなく、活動の重みを考えさせられた。

表６．第４期：参加者アンケートより

- 皆さんと、不安に思うことなど話して、気持ちが楽になればと思い来ました。とても楽しく過ごせました。満足です。（H.24.７.７）
- 先生と面談でお話しさせていただきたいと思ってきました。気持ちの確認ができました。（H.24.７.７）
- 天気が良くなくて、家で閉じこもってばかりだったので、子どもたちがスタッフの方々と楽しく過ごせたらと思ってきました。（H.24.７.21）
- 普段なかなか自分の悩みを話せるような友達がいないので、また皆さんと話したいです。（H.24.７.21）
- 久しぶり（２週間ぶり）なので、娘と昨日からワクワクしてました。
  （注：前の週は九州北部豪雨のため中止）（H.24.７.21）
- 子どもたちの心の安定、そして楽しんでる姿を見るため、またご挨拶がてら、私自身も皆さんとお話しして楽しい時間を過ごしたかった。（H.24.７.21）
- また皆さんとお話をしたくて来ました。グチを聞いていただき、申し訳ありません。でも、スッキリしました。（H.24.８.11）
- 用事があって遅れての参加だったけれど、いつものように楽しく過ごせたらと思いました。（H.24.８.18）
- 来週も顔なじみの大好きなメンバーの方々のお話を聞くのが楽しみです。（H.24.８.18）
- 酷暑の佐賀での子育て…のご苦労話に、胸が痛みました。ほっとする場があることの大切さを、改めて感じました。（H.24.８.25）
- 悩みを相談し、私の気持ちが少し楽になったので、子どもたちにも楽になるように接してあげたい。（H.24.９.１）
- いつも、話す人がいなくて寂しいので、みんなで楽しい話がしたい。毎週楽しませていただき、本当に感謝しています。（H.24.９.15）
- 楽しくお話ができ、子どもたちもスタッフの皆さんと笑顔いっぱいで安心しました。（H.24.９.15）
- 先週お休みだったので、心待ちにしてました。（H.24.９.29）
- ２週間ぶりなので楽しみ！！るんるんして来ました♪（H.24.９.29）
- 福島に残っているご主人の健康の心配…皆で胸を痛めながら聞きました。（H.24.10.13）
- 煎茶のお手前を親子で楽しみに来ました。（H.24.10.20）
- いつも、いろんな企画を立てていただきありがとうございます。普通できない体験で、本当に楽しかったです。（H.24.10.20）
- 私は落ち着いて話ができたし、子どもは外に出てスタッフの方と一緒に楽しんでいるようであったので良かったです。（H.24.10.27）
- 皆さんとお話がしたくて。毎回子どもたちが楽しみにしています。（H.24.10.27）
- やっぱりほっとひろばに来てみんなの顔を見ると安心します。（H.24.10.27）

夏休みが開け、一時帰省から日常に戻り、９月にまた新しい参加者を１家族お迎えした。

３．考　　察

ここでは（第１報）で述べた第１期を除き、第２期～第４期について、経過に従い考察を試みる。

１）第２期

この時期は、クリスマス会をピークに参加者が増加した時期である。

第１期で地道に活動を重ねてきて、それが口コミによって少しずつ情報が広がり、新規の参加者も増えてきたようである。

クリスマス会のアンケートに見られたように、毎年何らかの形でクリスマスを祝っていたが、今年はできないと思っていた、それが今年もできて嬉しい、という感想が寄せられた。

被災者にとってはこのような年中行事を行うことは、失われた日常を取り戻すささやかな第一歩なのかも知れないと考えさせられた。

また、同じアンケートの中で、普段は寂しく不安に過ごしていることも語られていた。活動自体は定期的に行われているが、寂しさや不安が強いとき、人は外に出て行こうとする気力も弱くなり、抑うつ的になることは十分考えられる。そのようなときに、このような行事を催すことで、参加してみようかなという気持ちを起こしていただいたり、あるいはそれを一つの通過点ではあっても、目標に生活していただくことで、見通しの持ちにくい生活の中にもささやかではあっても目標を持てることは、日々の生活の支えになるのではないだろうか。この日だけではなく、年が明けてからも多くの参加者があったことは、行事を開催することで得られる活動性が、その後も一定期間持続していることを示唆しているように考えられる。

また、この頃より、大人グループでも、悩みや、不安、葛藤、日頃思っていることなどをその場で話すことで、気持ちが軽くなるであるとか、聞いてもらえてよかったであるとか、ここでしか話せないことがある、とか、だからみんなでほっとする時間が大切である、などの気持ちが表明されるようになってきた。

このグループは、最初から治療的な効果を狙って提供していたものではなかったが、参加者の自主性・自発性・主体性を尊重し、行事などを通して親密感や凝集性を高め、継続していく中で、利用者の中に自然に、この場はそのような目的に使っても大丈夫なのだとの安心感や信頼感が醸成されていき、ここでしか話せない、と思っていただけるような場に成長していったのではないだろ

うか。逆に言えば、そのような場を提供するためにはこれだけの時間や継続性が必要であり、最初から「癒しの場、心理療法の場を提供します」というスタンスで構えていたのでは、むしろ「そんなものは必要ない」と拒まれていた可能性もあるのではないかと考えられる。

そのようなグループの展開の中で、震災一周年を迎え、家にいると考え事ばかりしているのでここでゆったりとした時間を過ごしたい、と、参加していただけたことは、特にアニバーサリー反応が出現しやすいこの時期において、利用者の精神的な安定を支える場として、活動が機能していたと考えることができよう。

2）第３期

年度が替わり、生活のパターンも変化をするこの時期、一時的に参加者が減った。しかし、この時期も継続して参加していたメンバーからは、カウンセリングを受けたい、みんなで話をして、自分の悩みが少しでも軽くなれば、私の悩み、皆さんの悩み、お互い無理なくお話しできたら、等、それぞれが様々な悩みを抱えて真剣な思いで参加をされていることが伺われる（表４）。第２期を経て、ここが、各自悩みを持ち寄りそれを話してスッキリできる場であることが浸透したかのようである。避難者が日々様々な悩みを抱えて生活をしていることを考えると、多少参加者の増減はあっても、この場を提供し続けることの重要性を改めて痛感する。

そのような中、一周年記念の行事は、大盛況であった。25名という参加者の数と同時に、招待状を TV 台に飾り楽しみにしていたという記述（表５）からも、その期待の大きさが伺える。

先の見えない、見通しを持てない生活を余儀なくされ、ともすると気持ちが沈みかねない避難者にとって、このような行事を企画することで、近い将来の目標として、灯台の灯りのような役割を果たせれば幸いである。

また、親自身様々な不安や悩みを抱えつつ、それをあからさまに前面に押し出してくるのではなく、子どもの安心・安定を前提として、子どもが満足しているなら私も、と、漸く親が自分自身の不安や悩みを表出しやすくなっているような記述も、当初より通して頻繁に見られる。

不登校児の親面接を続けていると、親自身の葛藤や、夫婦間、家族間での葛藤が語られるようになることは珍しくない。本来葛藤を抱えている親に先立って、子どもが IP（identified patient）として、いわば「露払い」の役割を果たしていると考えることもできる。今回のこの活動を立ち上げる際に、子どもに対する放射線被害を恐れ避難してきている参加者が多いのではないかと予想し、子どもを丁寧に預かることができる態勢を整えたことは、親の継続的な参加や、その中で親自身が悩みや葛藤を語り、共有していく雰囲気を醸成していく上でも有効な働きを果たしているのではないかと考えることができる。

3）第４期

12月のクリスマス会と同様、６月の一周年記念行事の後も、多くの参加者が続いた。やはり行事を挟むことで避難されている方に何らかの活動性や積極性を奮い起こさせる効果があるのではないかと考えられる。

また、この時期に元の居住地に戻られる方もあったり、あるいは夏休みを利用して一時帰省をし、その後、心が揺れる方もあった。その背景には、元の居住地に家族を残してきて、生活が引き裂かれている現状もある。

10月で、震災や原子力発電所の事故から１年半が経過しているが、参加者のアンケートを見ている限り、不安や悩みは解消されるどころか、むしろ顕在化しているのではないかとすら感じられる（表６）。

震災・事故直後の混乱を脱し、生活のパターンが整ってきたところで、冷静に客観的に自らの置かれている立場を見ることができるようになり、そこから、今後の生活設計を考えようとしたときに、むしろこの時期だからこそ、改めて、不安や悩みに直面せざるを得ない現状があるのではないだろうか。そのような時期だからこそ、同じような体験をしている避難者同士が集い、日々の思いをぶつけ合い、そうすることで少しスッキリしたり、楽しいと体験したりできるような活動、場は、まだしばらくの間、避難者にとって必要とされていくのではないだろうか。だからといってこのような場は、一朝一夕に設けられるものではなく、これまでの活動の積み重ねの中で、培われてきた安心感や信頼感があるからこそ、そのような場として、現在機能することができているであろうことは、想像に難くない。

4）今後の課題

３）で述べたような役割が現に求められ、機能していることを考えると、この活動の今後の展開もなお、慎重でなければならないと考えられる。今この活動を閉じたり、フェードアウトしていくことは、いかにも尚早であるように思われる。しかしだからと言って、このままの形で継続していくことは可能なのであろうか。またそのことが、逆に利用者の中にある種の依存心を生じさせないとも限らない。利用者にとって、人生上の今後の見通しが持てないのと同様に、この活動自体も、容易に今後の見通しを持つことは許されないが、大震災・津波と原子力発電所の爆発という未曾有の事態であるからこそ、事態の推移を見守りながら、両者のニーズを丁寧に汲み取りつつ、今後の活動の方向性を見定めていきたい。

４．おわりに

平成23年６月より発足した「ほっと広場西九大」について、平成24年10月末までの活動を報告し、考察した。

この活動は１年以上経過した今も継続中であり、参加者も漸増してきた。先例のない活動であり、今後の見通しについてはなお不確定である。

しかし、参加者の声を聞く限り、この活動は今後もまだ継続されていくことが必要とされている様に思われる。未だ手探りではあるが、利用者のニーズを確かめながら、一歩一歩前に進んでいければと思う次第である。

＜付記＞

これまでほっとひろば西九大にご参加いただき、本論文を発表するに当たって、快くご了承いただいた参加者の皆様に、心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

池田久剛・長野恵子・高尾兼利・古賀靖之・西村喜文（2012）：東日本大震災被　災者支援活動の試み－ほっとひろば西九大・経過報告（第１報）－　西九州大　学健康福祉学部紀要

東日本大震災被災者支援活動「ほっとひろば西九大」活動報告書（2012）　西九州大学臨床心理相談室

日本小児精神医学研究会・編（1995）：災害時のメンタルヘルス